

松 山 大 学 論 集
第 29 卷 第 1 号 抜 刷
2 0 1 7 年 4 月 発 行

松大生「最初の一歩」の効果測定

熊 谷 太 郎
安 田 俊 一

松大生「最初の一步」の効果測定*

熊 谷 太 郎
安 田 俊 一

1 はじめに

中央教育審議会による2012年「質的転換答申」、2014年「高大接続答申」など一連の答申は、2008年の「学士課程答申」で提起された「学位の質保証」にほぼ端を発している。

少子化と大学進学率の上昇による大学のユニバーサル化によって多様な学生を迎える中で、「最高学府」といわれた大学ではそれまでの教育を維持することが困難になってきており、「学士」という学位の質を社会に保証するためには大学教育の中味を変え、教育結果についての責任を負うことが求められている、というのが「学士課程答申」の趣旨である¹⁾。「学士課程答申」ではそのために外形的な要件である「3つのポリシー（学位授与方針、教育課程編成・実施方針、入学者受入れ方針）」「FD（ファカルティ・ディベロップメント）」が強調され、「質的転換答申」では教育課程の体系化、事前・事後学修時間の確保による単位の実質化など、教育の実施方法についての転換を求め、「高大接続答申」ではそれらの改革を前提とした上での中等教育との接続を要請している。

こうした一連の改革要求は、裏を返せば「このままでは大学が社会の要請に

* 本論文は2015年度松山大学教育研究助成制度の成果論文である。なお、あり得べき誤謬はすべて筆者の責任である。

1) 社会の期待に大学が応えられているのかどうかとの問いかけは2005年の「将来像答申」で提起されたものである。

応えられないのではないか」との文科省の危機感を表しているとみることでもできるが、そうしたいわゆる「お上の命令」は別にしても、特に私立大学にとっては、市場原理が働くため、社会から「役に立たない」と見なされれば容赦なく淘汰されることを考えると、こうした一連の大学教育改革への要請を、文科省に対する「面従腹背」でやり過ごすばかりではいられない。そのため各大学ではFDに限らず、具体的な教育改革がすすめられているところである。

近年の入学生の状態を考えたときに重要な視点は「意欲」の問題である。(株)ベネッセコーポレーションは、2011年12月に情報誌 *Between* で「モチベーションクライシスにどう向き合うか」と題した特集を組み、大学適応度が低い現代の学生に対応する取り組みを紹介している。

この特集によると、ほぼどの学力層においても大学生活になじめない学生が一定数存在し、退学や休学の問題が発生していること、その対策のために「きめの細かい学生支援」を行う大学の紹介がなされているが、こうした「意欲」については、とりわけ入試難易度における中位難易度（入試偏差値45～50）にある大学での「不本意入学」による意欲の欠落に注意を向けている。

また、同誌2013年1月号では、「志望動機が曖昧な社会科学系の広報」との記事で社会科学系の学問に関する情報が高校生へ伝わりにくいことに起因する、入学志望動機の不足についての記事を掲載している。この記事は大学広報の立場から情報発信についてのポイントを考察した記事であるが、こうした広報の見直しが必要だと考えられていること自体が、社会科学系学部での学生の意欲低下が全国的にも大学の課題として認識されていることを示している²⁾

社会科学系学部が大半を占める松山大学（以下、本学）は上で紹介したポイントにちょうど当てはまっている大学であり、実際、「学生の意欲がないように見える」という問題意識は教職員の間で共通理解となっているとあってよい。

大学教育に質保証が求められている中で、入学する学生の大学に対するさま

2) 進研アド(2012, 2013)

ざまな意味での「意欲」が低い状態は好ましい状態ではない。

正課学習を含めた大学生活への意欲が低いままの学生に専門教育を行うことを、我々は「プールに入った学生に泳ぎを教える」と例えたことがある³⁾

一般的に、大学教員はなにがしかの学問領域に於ける「専門家」であり、泳ぎで言えば「クロール」や「バタフライ」などの専門的な種目について教えることはとてもうまい。こうした「種目」を学生が身につけるためには、「バタ足」や「息継ぎ」といった泳ぐための基本的なテクニックが身につけていることが前提だし、なにより「プールに入って」いなければならない。我々が蓄積している教育テクニックは「プールに入っている」「基本的なテクニックを身につけている」学生を対象にしている。

しかし、泳ごうと思わない学生は「プールに入ろうとしない」ので、泳ぎを教えるところまでたどり着いていない。

このような学生が、「クロール」「バタフライ」といった泳ぎ方を身につけることなく「プールから出て外へ行く＝就職して社会に出る」ことが続けば、冒頭で指摘したように、社会からは「大学はちゃんとした人材養成を行っていない」との批判を受けることになり、それが続けば、そうした大学への入学者は減少し、大学そのものが社会から淘汰されることにもなりかねない。

「プールに入れば面白いかもしれない」と、学生自身が自覚的にプールへ入るようになる仕組みが求められているのである。

こうした問題意識は10年ほど前から大学関係者の間でも意識されるようになっており、教学改革を目指した本学での取り組みとして2008年度から3年間にわたって「学内GP」と呼ばれる試みがなされた。当時文科省でも「大学GP」として、優れた取り組みに対して補助金を付けるプログラムが実施されていたが、その「学内版」の位置づけであった⁴⁾

本学経済学部は「大学生活への意欲を高める導入教育プログラム」として、

3) 初年次教育学会第3回高千穂大学大会での発表。安田俊一他(2010)

上述の「プールに入れる」ためのプログラムを提案し、3年間にわたって学内GPに採択された。

このプログラムは1年次生を対象として、(1)入学直後に行われる「自己の探求」プログラム、(2)1年次後期に行われる「社会人セミナー」を中心としている。

(1)の「自己の探求」プログラムは、北森義明順天堂大学名誉教授が開発し(株)ラーニングバリューが提供する、グループワークを中心とした自己理解・他者理解を深めるプログラムであり、入学直後の学生に自己理解を促し、それをベースに他者理解をすすめて仲間作りを行うことで、大学への定着と今後の大学生活への参加意欲を引き出す目的を持っており、筆者等の調査によって、学生のコミュニケーション能力、自尊感情、「社会人基礎力」の向上に効果を持つことが実証されている⁵⁾

(2)の社会人セミナーは、一般的な社会人の方々をお呼びして話をさせていただくプログラムで、一人の社会人講師につき少人数(複数の基礎演習クラスで20~50名)で実施される。このプログラムはできるだけ「等身大」の社会人の方々からさまざまなキャリアパスの話を聴くことで、2年次以降の大学生活を「ライフプランの中の一部」として意識することで、より長期的な視点から大学生活を積極的に送るきっかけとなることが期待されているプログラムである⁶⁾

学内GPによる補助金終了後は(1)については「松大生最初の一步-自分をみ

4) GP: "Good Practice"。こうした「プログラムを対象とした特別補助金」は各大学での取り組みを加速した反面、補助金がつくのはプログラム期間中だけであり、その後は各大学での自助努力が求められたため、プログラムのために雇用された職員の問題や、プログラム自体が大学全体の教学に定着するかどうかの問題などが指摘され、GP補助金は廃止された。本学でもプログラムの持続性を巡っては同じような問題があり、現在は実施されていない。

5) 松井名津他(2014)、および熊谷太郎他(2015)

6) 社会人セミナープログラムについては、熊谷太郎他(2016)において坂柳恒夫(1996)のキャリア・レディネス尺度を用いたアンケートにより調査研究を行っている。その結果「人生キャリア」項目について大きな効果があることを実証した。

つめ、仲間を探そう」(以下、「最初の一步」)とプログラムタイトルを変えて、入学直後の仲間作りに焦点をあてたプログラムとして、経済学部一般基礎演習の希望クラスを対象に2015年まで実施した⁷⁾(2)については希望クラスを対象に継続して実施している。

こうした取り組みの中で、プログラムに参加した学生によるアンケートの回答を中心にプログラム評価のための材料が揃ってきており、上述のように分析も進んでいる。

本稿では2015年4月に「最初の一步」プログラムを受講した学生に関して、自尊感情、大学適応感、社会的スキルに関してプログラム前後での変化を分析する。

2 調査方法と記述統計

質問紙は経済学部新入生ガイダンスで配布され、その場で回答・回収を行った。また、2015年4月18日(土)、19日(日)及び4月25日(土)、26日(日)に行われた「最初の一步」受講終了時に、経済学部新入生ガイダンスで実施したアンケートと同じ質問紙を配布し、回答・回収を行った。したがって、「最初の一步」受講者は、プログラム前後で同じアンケートに回答している。そこで、以下では経済学部新入生ガイダンスで回収した質問紙への回答については「受講前」、 「最初の一步」受講終了時に回収した回答については「受講後」と呼ぶ。

「最初の一步」は、1年次生の必修科目である「一般基礎演習」のうち、担当教員が希望した場合に、その教員の担当クラスに所属する学生が上述のいずれかの日程で2日間受講した。

7) 2016年度以降は実施できていない。プログラムの実施に当たり、講師の手配が困難になったことが中止の原因である。こうしたプログラムを継続するにあたっての問題点が現れたと考えられる。

表1 記述統計

性別	男性	271	出身地	愛媛県東予	58
	女性	133		愛媛県中予	167
部活経験	スポーツ・体育会系	307		愛媛県南予	49
	文化会系	66		愛媛県以外の四国	90
	部活経験無し	19		中国・九州地方	33
志望順位	第1志望	231		その他の日本の地域	5
	第2志望	113		日本以外	3
	第3志望	38	受講の有無	受講した	248
	それ以外	20		受講していない	157

2.1 記述統計

まず、本学経済学部の1年次生の特性を概観する。表1は1年次生の記述統計である。なお、表中の「志望順位」は本学経済学部の志望順位を表している。

経済学部は例年おおよそ男性が7割、女性が3割程度であり、今回の調査でもおおよそ平年並みの割合となっている。愛媛県内比率は約68%であり、全学の比率よりもやや低めの数値となっている。県内では中予地方出身者が多く、県内出身者の約67%を占める。県外では愛媛県以外の四国地方出身者が多く、全体の約22%を占める。愛媛県内を含めた四国出身者は全体の約9割を占めている。経済学部1年次生のうち、「最初の一步」を受講した学生は248名おり、全体の6割以上が受講している。

2.2 質問項目

本研究では、以下の項目に関してどのような効果が見られるかを検証することを目的としている⁸⁾。

質問項目は以下のとおりである。

8) 質問紙調査における質問項目の詳細については補論を参照せよ。

1. 自尊感情：自尊感情は Rosenberg (1965) によって考案されたもので、「自己イメージの中核的な概念で、一つの特別な対象、すなわち自己に対する肯定的または否定的な態度」(Rosenberg (1965)) とされている。本調査では、Rosenberg (1965) によって作成された 10 項目アンケートを山本真理子他 (1982) が作成した邦訳版を使用した。回答形式は「あてはまらない」(1 点) から「あてはまる」(5 点) までの 5 件法を採用しており、得点範囲は 10 点から 50 点である。
2. 社会スキル：社会スキルの専門家である Goldstein 他 (1980) が開発した若者のための 50 のスキルチェックリストから菊池が社会スキルを測るために作成した社会スキル尺度「Kiss-18 (Kikuchi's Scale of Social Skills : 18 items)」を用いた。回答形式は「まったく思わない」(1 点) から「強く思う」(5 点) までの 5 件法を採用しており、得点は 18 点から 90 点に分布する。菊池章夫 (2004) によると、社会スキルとは「対人関係を円滑にするスキルで、相手から肯定的な反応をもらい、否定的な反応をもらわないようにすること」と定義している。菊池の定義における肯定的な反応、否定的な反応は心理学における交流分析のポジティブ・ストロークとネガティブ・ストロークに当たる。
3. 大学適応感：大久保・青柳 (2003) によって作成された大学生用適応感尺度を用いた。適応尺度は 44 項目あり、回答形式は「まったくあてはまらない」(1 点) から「非常にあてはまる」(5 点) までの 5 件法を採用している。

3 受講グループと非受講グループの特性

プログラムの効果があったかどうかを測る前に、質問紙調査におけるそれぞれの指標について、プログラムの受講グループと非受講グループに特性の差があるかどうかを検定する。受講グループと非受講グループについて、各指標の平均値に差がないことがわかれば、学生の個別差は生じるかもしれないが、全

体として効果があることが明らかとなるためである。

受講グループと非受講グループの差を検討するためにt検定を行った。表2は受講グループと非受講グループの各指標グループ統計量を表している。その結果、自尊感情 ($t(403) = -.980, n. s.$), Kiss-18 ($t(403) = -1.471, n. s.$), そして大学適応感 ($t(403) = -.581, n. s.$) のいずれの指標とも有意な得点差は観察されなかった。プログラムを受講する前の新入生の特性に差がないことが明らかとなった。

次に、男性と女性を分け、受講グループと非受講グループの差を測るためにt検定を行った。その結果が表3と表4にまとめられている。男性の各指標については自尊感情 ($t(269) = -.221, n. s.$), Kiss-18 ($t(269) = -1.279, n. s.$), そして大学適応感 ($t(403) = -.172, n. s.$), 女性の各指標については自尊感情 ($t(131) = -1.441, n. s.$), Kiss-18 ($t(131) = -.611, n. s.$), そして大学適応感 ($t(131) = -1.079, n. s.$) だった。したがって、性別でも受講グループと非受講グループの差は観察されなかった。

このことから、「最初の一歩」は性別に関係なく、効果が現れるプログラム

表2 受講グループと非受講グループの平均値、標準偏差及びt値

	受 講		非受講		t 値
	平 均	標準偏差	平 均	標準偏差	
自尊感情	29.96	6.30	29.34	5.81	-.980
Kiss-18	53.16	9.01	51.79	9.27	-1.471
大学適応感	139.84	20.79	138.78	18.12	-.581

表3 受講グループと非受講グループの平均値、標準偏差及びt値 (男性)

	受 講		非受講		t 値
	平 均	標準偏差	平 均	標準偏差	
自尊感情	29.78	6.48	29.63	5.52	-.221
Kiss-18	53.10	9.00	51.62	9.58	-1.295
大学適応感	139.37	21.04	139.79	17.43	.172

表4 受講グループと非受講グループの平均値、標準偏差及びt値（女性）

	受講		非受講		t 値
	平均	標準偏差	平均	標準偏差	
自尊感情	30.31	6.00	28.71	6.43	-1.441
Kiss-18	53.14	9.07	52.16	8.657	-0.611
大学適応感	140.51	20.39	136.61	19.59	-1.079

であることが期待される。実際にプログラムに効果があるのか、あるとしたらどの指標のどの項目に効果が現れやすいのかについては次節以降で詳細に検討する。

4 「最初の一步」プログラムの効果測定

4.1 受講前後の各指標に与える影響

最初に、各指標における受講前と受講後について、対応のあるt検定を行った。その結果が表5にまとめられている。自尊感情 ($t(247) = -7.254, p < .001$) は2.31, Kiss-18 ($t(247) = -6.596, p < .001$) は3.62, そして大学適応感 ($t(247) = -9.155, p < .001$) は10.15ポイント上昇しており、いずれの指標においても有意な差が見られた。

「最初の一步」は、大学における居場所づくり・友達作りを目的の1つとしている。また、プログラムはグループワークが中心であり、他者の力を借りて自己理解を深め、他者の自己理解を深める手助けもすることでチームビルディ

表5 受講前後の平均値、標準偏差及びt値

	受講前		受講後		t 値
	平均	標準偏差	平均	標準偏差	
自尊感情	29.96	6.30	32.26	6.33	-7.524***
Kiss-18	55.96	9.70	59.58	10.70	-6.596***
大学適応感	139.84	20.79	150.00	22.14	-9.155***

*** : $p < .001$

ングを体験するものである。したがって、この2日間でかなり濃密なコミュニケーションを取り、グループのメンバーが協力し合う必要が生じる。その中で、自らが気づき、ときにグループメンバーから気づきを得ることで、自己理解を深め学んでいく。このようなサイクルが、自尊感情や社会スキルを高めていき、また仲間を作っていくことで大学に適応していると感じるようになるのだと考えられる。

次に、各指標の個別項目の中で、どの項目が有意に向上したのかを以下で考察するが、有意な差が見られた項目に限定した一覧表にまとめる。

最初に自尊感情の個別項目から考察する。表6は自尊感情の個別項目における受講前後の平均値、標準偏差及びt値を表している。有意な差が見られなかった項目は第8問「私は物事を人並みには、うまくやれる。」と逆転項目の第12問「もっと自分を尊敬できるようになりたい。」である。第8問については、受講前の平均点が高く、今回の1年次生はもともとこの項目については、自信を持っていた可能性がある。第12問については、これまでの調査でも有意差が見られづらい項目であった。2日間のプログラムでは、自身を尊敬することが難しいと解釈できるのか、それともそのような気持ちに目覚めたのかの

表6 受講前後の平均値、標準偏差及びt値（自尊感情）

	受講前		受講後		t 値
	平均	標準偏差	平均	標準偏差	
第5問	3.32	1.04	3.57	1.03	-3.661***
第6問	3.20	.94	3.44	.865	-3.858***
第7問	3.33	1.20	3.53	1.16	-2.658**
第9問	2.91	1.15	3.15	1.08	-3.259***
第10問	2.90	1.03	3.11	1.04	-3.086***
第11問	2.63	1.08	3.10	1.10	-6.613***
第13問	2.91	1.30	3.29	1.10	-4.785***
第14問	3.29	1.10	3.46	1.08	-2.433**

*** : $p < .001$, ** : $p < .01$

判断が難しい。この点については、追跡調査が必要である可能性がある。

その他の項目については、いずれも0.1%有意、もしくは1%有意で向上した。特に第11問「私はだいたいにおいて、自分に満足している。」と第13問「自分は全くだめな人間だと思うことがある。」の2つの項目の平均値の上昇が大きかった。また、第13問については、松山大学経済学部が第3志望の学生の上昇幅が大きく(.593)、自信を持てるようになった可能性がある。

次に、Kiss-18の個別項目について考察する。Kiss-18については、表7にまとめられている。第19問「知らない人でも、すぐに会話が始められますか。」、第20問「まわりの人たちとの間でトラブルが起きても、それを上手に処理できますか。」、第29問「初対面の人に、自己紹介ができますか。」がそれぞれ.403、.302、.569ポイント上昇し、特に上昇幅が大きかった。「最初の一步」で、グループを組んだ後に『記者会見』というプログラムがある。このプログラムは、事前に自分の名前や趣味、特技、生年月日などが書かれた名札を作成

表7 受講前後の平均値、標準偏差及びt値 (Kiss-18)

	受講前		受講後		t 値
	平均	標準偏差	平均	標準偏差	
第15問	2.95	1.08	3.18	1.07	-3.108**
第16問	3.08	.97	3.35	.905	-4.205***
第19問	2.80	1.25	3.21	1.22	-5.559***
第20問	2.98	.89	3.28	.84	-4.932***
第21問	2.88	.93	3.14	.86	-4.584***
第22問	3.04	1.01	3.24	.96	-3.131**
第24問	2.74	1.07	2.91	1.05	-2.394*
第25問	2.97	1.02	3.12	.96	-2.204*
第27問	3.23	1.11	3.39	1.00	-2.226*
第29問	2.92	1.16	3.49	1.05	-7.956***
第31問	3.48	.93	3.69	.827	-3.356**
第32問	2.98	1.11	3.19	1.00	-2.578*

*** : $p < .001$, ** : $p < .01$, * : $p < .05$

し、その名札をもとに、まさに芸能人のような記者会見を行っていく。通常の自己紹介であれば、名札に書かれている情報のみを伝えて終わるが、記者会見ではグループメンバーが次々に質問をしていく。

また、そのあとに『総当たりインタビュー』というプログラムを行う。これは、決められた話題について1対1で話を聞きあう、お互いをインタビューし合うプログラムである。話は必ずしもテーマに沿わなくても構わず、話が自然と弾んでいく。このようなプログラムが組み込まれていることから、第19問や第29問のポイント上昇幅が大きいのであろう。また、『コンセンサスを求めて』というプログラムでは、ときに意見がぶつかることがあるかもしれないが、感情的にならずに問題を解決する関係性の構築を学ぶことが多いため、第20問のポイント上昇幅が大きいと推測できる。

反対に、受講前後で有意な差が見られなかった項目は第17問「他人を助けることを、上手にやれますか。」、第18問「相手が怒っているときに、うまくなだめることができますか。」、第23問「生活や学習をするときに、何をどうやったらよいか決められますか。」、第26問「生活や学習の上で、どこに問題があるかすぐに見つけることができますか。」、第28問「あちこちから矛盾した話が伝わってきても、うまく処理できますか。」、第30問「何か失敗したときに、すぐに謝ることができますか。」だった。プログラムの性質上、前述の項目のような状況に遭遇するシーンが少ないのかもしれない。ほとんど初対面同士なので、怒るシーンに遭遇したり矛盾した話が出てくるシーンに遭遇するようなことはおそくないのだろう。また、生活や学習における問題の発見ややり方の決定というようなことはプログラムに含まれないため、有意な差が観察されなかったと考えられる。

最後に、大学適応感の項目を考察する。大学適応感については、表8にまとめられている。比較的大きな変化を示した項目は第33問「自由に話せる雰囲気である。」、第47問「必要とされていると感じる。」、第48問「他人から頼られていると感じる。」、第49問「自分からその場に入っていけないと感じる。」、

表 8 受講前後の平均値, 標準偏差及び t 値 (大学適応感)

	受講前		受講後		t 値
	平均	標準偏差	平均	標準偏差	
第 33 問	3.05	1.10	3.65	1.01	-8.485***
第 34 問	3.14	.980	3.42	.965	-4.289***
第 35 問	3.35	1.01	3.61	.967	-3.728***
第 36 問	2.01	1.06	2.35	1.07	-4.017***
第 37 問	3.29	.976	3.45	.968	-2.299*
第 40 問	3.33	1.07	3.47	1.08	-2.091*
第 43 問	3.11	.877	3.43	.906	-4.687***
第 44 問	3.29	1.23	3.55	1.18	-3.136**
第 47 問	2.73	.870	3.19	.899	-7.000***
第 48 問	2.68	.961	3.13	.901	-6.651***
第 49 問	2.85	1.06	3.26	1.08	-5.052**
第 50 問	2.96	1.10	3.35	1.03	-5.403***
第 51 問	3.20	1.07	3.43	1.09	-3.263**
第 53 問	2.70	.863	3.09	.906	-6.341***
第 55 問	3.25	.902	3.53	.839	-5.012***
第 56 問	3.27	1.08	3.55	1.03	-3.515**
第 57 問	3.44	1.17	3.83	1.02	-5.012***
第 59 問	3.15	1.26	3.53	1.15	-4.415***
第 60 問	2.96	1.14	3.31	1.01	-4.637***
第 61 問	3.42	1.10	3.68	1.00	-3.460**
第 63 問	3.33	1.11	3.55	.984	-2.984**
第 64 問	2.70	.853	3.11	.820	-7.393***
第 65 問	3.33	1.12	3.83	.920	-6.884***
第 66 問	2.93	1.08	3.53	.977	-7.942***
第 68 問	3.31	.803	3.61	.888	-4.639***
第 70 問	3.00	.856	3.35	.893	-5.721***
第 71 問	2.83	.896	3.28	.896	-6.760***
第 72 問	2.96	.972	3.27	.993	-4.513***
第 73 問	2.65	.983	2.92	.873	-3.809***
第 74 問	2.96	1.06	3.54	1.05	-7.779***
第 76 問	3.30	1.13	3.55	1.21	-2.798**

*** : $p < .001$, ** : $p < .01$, * : $p < .05$

第64問「良い評価がされていると感じる。」、第65問「周りの人と楽しい時間を共有している。」、第66問「周囲に溶け込んでいる。」、第71問「一定の役割がある。」、第74問「満足している。」である。プログラム全般的に、グループワークが中心であり、かつお互いに聴くことやチームビルディングを意識するためこれらの項目の平均値が大きく向上しているのだろう。また、プログラムの最後に「プレゼントカードの交換」がある。これは、相手の持ち味を直接カードに書き、それを読み上げるという、グループメンバーへのフィードバックである。毎回盛り上がるプログラムで、その要因の1つは相手から認められるということであると考えられる。認められれば楽しい時間となり、また満足もすると考えられる。

有意差が観察されなかったプログラムは第38問「無視されていると感じる。」、第39問「やるべき目的がある。」、第41問「他人から干渉されているように感じる。」、第42問「相手に迷惑をかけていると感じる。」、第45問「浮いている。」、第46問「自分以外が親密にコミュニケーションをとっていると感じる。」、第52問「熱中できるものがある。」、第54問「役に立っていないと感じる。」、第58問「嫌々ながら入っていかなくてはならないと感じる。」、第62問「周りの人と類似している。」、第67問「疎外されていると感じる。」、第69問「周りに共感できる。」、第75問「好きなことができる。」である。プログラムは、コンセンサスを要するものやグループのメンバー全員でコミュニケーションを取らないと解決できない課題が多い。また、2日目の座学では、そもそもコミュニケーションとは何かや自分の価値観や人生におけるポジションを学ぶこともあり、迷惑をかけていたり浮いていたりすることを感じない構成となっている。しかし、2日間のプログラムではこれらに関連する項目は解消されない可能性があり、引き続き一般基礎演習などで居場所の確保を含めて接していくことが必要なのかもしれない。更に、これまでの同プログラムの研究結果を考慮すると、逆転項目については有意に向上することが難しく、長期的にネガティブな感じ方を解消する必要がある。

4.2 プログラムにおける性差と志望順位差の検証

次に、各指標における受講前と受講後の性差を検証する。男性と女性の受講前と受講後の平均値、標準偏差とt値は表9にまとめられている。Kiss-18（受講後）のみ性差（ $t(244) = 2.042, p < .05$ ）は有意で、男性のポイントが高かった。Kiss-18の項目別に見ると、第16問「他人にやってもらいたいことを、うまく指示できますか。」（ $t(244) = 2.165, p < .05$ ）、第22問「気まずいことがあった相手と、上手に和解できますか。」（ $t(244) = 2.471, p < .05$ ）、第25問「相手から非難されたときにもそれをうまく片付けることができますか。」（ $t(186.452) = 2.226, p < .05$ ）、第29問「初対面の人に、自己紹介が上手にできますか。」（ $t(244) = 2.132, p < .05$ ）だった。

第29問は別として、それ以外の性差のあった質問項目はグループワークによって課題を解決する際に必要であるが、男性の方が指示をしたり衝突したりするシーンが多かったのかもしれない。そういったシーンに多く遭遇し、うまく指示できたり処理できたりしたのかもしれない。特に女性の第25問の平均値が下がっていることから、うまくできなかつたと感じたと考えられる。

最後に、志望順位による差の検証をする。ここでは、第1志望と第1志望以外に分けて検証した。その結果が表10にまとめられている。受講前の自尊感情について、第1志望と第1志望以外で有意な差（ $t(245) = -2.188, p < .05$ ）

表9 男性と女性の受講前後の平均値、標準偏差及びt値

	男 性		女 性		t 値
	平 均	標準偏差	平 均	標準偏差	
自尊感情（受講前）	29.83	6.49	30.31	6.00	-.567
自尊感情（受講後）	32.39	6.43	32.07	6.05	.382
Kiss-18（受講前）	55.93	9.60	56.12	9.84	-.147
Kiss-18（受講後）	60.67	10.34	57.83	10.35	2.042*
大学適応感（受講前）	139.40	21.10	140.51	20.39	-.398
大学適応感（受講後）	149.90	22.17	150.35	22.34	-.151

* : $p < .05$

表 10 男性と女性の受講前後の平均値、標準偏差及びt値

	第1志望		第1志望以外		t 値
	平均	標準偏差	平均	標準偏差	
自尊感情 (受講前)	30.78	6.26	29.03	6.27	-2.188*
自尊感情 (受講後)	32.64	6.54	31.92	5.99	.371
Kiss-18 (受講前)	56.04	9.98	56.01	9.32	-.029
Kiss-18 (受講後)	60.01	10.97	59.43	9.74	-.431
大学適応感 (受講前)	140.25	22.37	139.40	18.93	-.321
大学適応感 (受講後)	149.89	23.55	150.33	20.45	.155

* : $p < .05$

が見られた。特に、第1志望以外の男性の自尊感情得点の向上が大きい⁹⁾。受講前の男性の自尊感情の得点差 ($t(160) = -3.032, p < .01$) は3.02あった。しかし、受講後の差 ($t(160) = -1.749, n.s.$) は1.76程度に縮小した。受講前に存在した志望順位による自尊感情の違いは受講後には消滅している。第1志望以外で松山大学経済学部に入学者は松山大学の他学部、もしくは他大学に落第し、第1志望よりも本意で入学したこともあり、新入生ガイダンスのときは自尊感情が低かったのかもしれない。しかし、「最初の一步」を受講し、仲間や友達が新たにできたことで改めて自身を肯定的に捉えることができたのかもしれない。

5 お わ り に

本論文では、「最初の一步」の効果を、自尊感情、Kiss-18、大学適応感の3つの指標を用いて検証した。結果として、(1)「最初の一步」を受講することで、上述の3指標は向上する、(2)「最初の一步」を受講した学生と受講していない学生にこれらの指標についてプログラム実施前には差がないことから、受講することで、多くの学生について3つの指標の得点向上が見込める、ことが明らか

9) 女性の自尊感情得点については、受講前 ($t(82) = .494, n.s.$) と受講後 ($t(82) = 1.068, n.s.$) いずれも第1志望と第1志望以外に差は見られなかった。

かとなった。大学に適応し、自身を肯定できる態度・感情はこれからの大学生生活に非常に重要であるし、社会に出てからも大切である。そういった意味で、「最初の一步」を4月の早い段階で実施したことは意味があったと考えられる。

今後は、追跡調査を行うことが重要である。本学は大学IRコンソーシアムに加盟しているので、IRデータと突き合わせ、受講した学生の勉強時間や大学における生活態度、受講した学生とそうでない学生の差やプログラムの持続効果などを検討していく必要がある。

また、経済学部では2015年から上回生についても同じアンケートを実施しており、今後は年次進行に伴う各指標の変化を追跡していくことが考えられている。

これらの調査は成績等の教学調査とマージすることが可能になっており、総合的な分析が可能である。これらのデータを用いて、因子分析を行い、因子構造や松山大学の学生にどのような特徴があるのかも合わせて検証・分析していく予定である。

参 考 文 献

- Rosenberg, M. (1965) *Society and the adolescent self-image* : Princeton University Press.
- 松井名津・岩村樹憲・熊谷太郎・安田俊一 (2014) 「松山大学経済学部1年生における『自己の探求I』プログラムの効果測定(1)」, 『松山大学論集』, 第26巻, 第3号, 49-63頁.
- 熊谷太郎・松井名津・安田俊一 (2015) 「松山大学経済学部新入生プログラムの効果測定－自尊感情への影響を中心に－」, 『松山大学論集』, 第27巻, 第1号, 17-33頁.
- 菊池章夫 (2004) 「Kiss-18研究ノート」, 『岩手県立大学社会福祉学部紀要』, 第6巻, 第2号, 41-51頁.
- 熊谷太郎・安田俊一・松井名津 (2016) 「初年次教育における社会人セミナーの効果」, 『松山大学論集』, 第28巻, 第1号, 27-58頁.
- 坂柳恒夫 (1996) 「大学生のキャリア成熟に関する研究－キャリア・レディネス尺度 (CRS) の信頼性と妥当性－」, 『愛知教育大学教科教育センター研究報告』, 9-18頁.
- 山本真理子・松井豊・山成由紀子 (1982) 「認知された自己の諸側面」, 『教育心理学研究』, 第30巻, 64-68頁.
- 安田俊一・松井名津・熊谷太郎 (2010) 「学生生活への意欲を高める導入教育の実践 (『自己の探求』プログラムの実施とその効果)」, 『初年次教育学会第3回大会発表要旨集』, 86-

89頁.

進研アド (2012) 「特集：モチベーションクライシスにどう向き合うか」, 『Between』, 1-21
頁, 12-1月.

—— (2013) 「志望動機が曖昧な社会科学系の広報は社会に引き付けた広報が鍵」,
『Between』, 32-33頁, 12-1月.

【C】 以下の設問には、現在のあなたの自己評価に最も近いと思う番号をマークしてください。

- 第15問 他人と話していて、あまり会話が途切れないほうですか。
1 まったく思わない 2 思わない 3 どちらでもない 4 思う 5 強く思う
- 第16問 他人にやってもらいたいことを、うまく指示できますか。
1 まったく思わない 2 思わない 3 どちらでもない 4 思う 5 強く思う
- 第17問 他人を助けることを、上手にやれますか。
1 まったく思わない 2 思わない 3 どちらでもない 4 思う 5 強く思う
- 第18問 相手が怒っているときに、うまくなだめることができますか。
1 まったく思わない 2 思わない 3 どちらでもない 4 思う 5 強く思う
- 第19問 知らない人でも、すぐに会話が始められますか。
1 まったく思わない 2 思わない 3 どちらでもない 4 思う 5 強く思う
- 第20問 まわりの人たちとの間でトラブルが起きても、それを上手に処理できますか。
1 まったく思わない 2 思わない 3 どちらでもない 4 思う 5 強く思う
- 第21問 こわさや恐ろしさを感じたときに、それをうまく処理できますか。
1 まったく思わない 2 思わない 3 どちらでもない 4 思う 5 強く思う
- 第22問 気まずいことがあった相手と、上手に和解できますか。
1 まったく思わない 2 思わない 3 どちらでもない 4 思う 5 強く思う
- 第23問 生活や学習をするときに、何をどうやったらよいか決められますか。
1 まったく思わない 2 思わない 3 どちらでもない 4 思う 5 強く思う
- 第24問 他人が話しているところに気楽に参加できますか。
1 まったく思わない 2 思わない 3 どちらでもない 4 思う 5 強く思う
- 第25問 相手から非難されたときにもそれをうまく片付けることができますか。
1 まったく思わない 2 思わない 3 どちらでもない 4 思う 5 強く思う
- 第26問 生活や学習の上で、どこに問題があるかすぐに見つけることができますか。
1 まったく思わない 2 思わない 3 どちらでもない 4 思う 5 強く思う
- 第27問 自分の感情や気持ちを、素直に表現できますか。
1 まったく思わない 2 思わない 3 どちらでもない 4 思う 5 強く思う
- 第28問 あちこちから矛盾した話が伝わってきて、うまく処理できますか。
1 まったく思わない 2 思わない 3 どちらでもない 4 思う 5 強く思う
- 第29問 初対面の人に、自己紹介が上手にできますか。
1 まったく思わない 2 思わない 3 どちらでもない 4 思う 5 強く思う
- 第30問 何か失敗したときに、すぐに謝ることができますか。
1 まったく思わない 2 思わない 3 どちらでもない 4 思う 5 強く思う
- 第31問 まわりの人たちが自分とは違った考えを持っていても、うまくやっていけますか。
1 まったく思わない 2 思わない 3 どちらでもない 4 思う 5 強く思う
- 第32問 生活や学習の目標を立てるのに、あまり困難を感じないほうですか。
1 まったく思わない 2 思わない 3 どちらでもない 4 思う 5 強く思う

【D】 以下の設問には、今のあなたの自己評価に最も近いと思う番号をマークしてください。

- 第33問 自由に話せる雰囲気である
1 まったくあてはまらない 2 あまりあてはまらない 3 どちらともいえない 4 ややあてはまる 5 非常にあてはまる
- 第34問 その状況で嫌われていると感じる
1 まったくあてはまらない 2 あまりあてはまらない 3 どちらともいえない 4 ややあてはまる 5 非常にあてはまる
- 第35問 リラックスできる
1 まったくあてはまらない 2 あまりあてはまらない 3 どちらともいえない 4 ややあてはまる 5 非常にあてはまる
- 第36問 他の人とまったくの初対面である。
1 まったくあてはまらない 2 あまりあてはまらない 3 どちらともいえない 4 ややあてはまる 5 非常にあてはまる
- 第37問 相手を理解できないと感じる。
1 まったくあてはまらない 2 あまりあてはまらない 3 どちらともいえない 4 ややあてはまる 5 非常にあてはまる
- 第38問 無視されていると感じる。
1 まったくあてはまらない 2 あまりあてはまらない 3 どちらともいえない 4 ややあてはまる 5 非常にあてはまる
- 第39問 やるべき目的がある。
1 まったくあてはまらない 2 あまりあてはまらない 3 どちらともいえない 4 ややあてはまる 5 非常にあてはまる
- 第40問 自分が場違いだと感じる。
1 まったくあてはまらない 2 あまりあてはまらない 3 どちらともいえない 4 ややあてはまる 5 非常にあてはまる
- 第41問 他人から干渉されているように感じる。
1 まったくあてはまらない 2 あまりあてはまらない 3 どちらともいえない 4 ややあてはまる 5 非常にあてはまる
- 第42問 相手に迷惑をかけていると感じる。
1 まったくあてはまらない 2 あまりあてはまらない 3 どちらともいえない 4 ややあてはまる 5 非常にあてはまる
- 第43問 受け入れられていると感じる。
1 まったくあてはまらない 2 あまりあてはまらない 3 どちらともいえない 4 ややあてはまる 5 非常にあてはまる
- 第44問 イヤだと思う人がいる。
1 まったくあてはまらない 2 あまりあてはまらない 3 どちらともいえない 4 ややあてはまる 5 非常にあてはまる
- 第45問 浮いている。
1 まったくあてはまらない 2 あまりあてはまらない 3 どちらともいえない 4 ややあてはまる 5 非常にあてはまる
- 第46問 自分以外が親密にコミュニケーションをとっていると感じる。
1 まったくあてはまらない 2 あまりあてはまらない 3 どちらともいえない 4 ややあてはまる 5 非常にあてはまる
- 第47問 必要とされていると感じる。
1 まったくあてはまらない 2 あまりあてはまらない 3 どちらともいえない 4 ややあてはまる 5 非常にあてはまる
- 第48問 他人から頼られていると感じる。
1 まったくあてはまらない 2 あまりあてはまらない 3 どちらともいえない 4 ややあてはまる 5 非常にあてはまる
- 第49問 自分からその場に入っていけないと感じる。
1 まったくあてはまらない 2 あまりあてはまらない 3 どちらともいえない 4 ややあてはまる 5 非常にあてはまる
- 第50問 ありのままの自分を出せている。
1 まったくあてはまらない 2 あまりあてはまらない 3 どちらともいえない 4 ややあてはまる 5 非常にあてはまる
- 第51問 自分だけ劣っていると感じる。
1 まったくあてはまらない 2 あまりあてはまらない 3 どちらともいえない 4 ややあてはまる 5 非常にあてはまる
- 第52問 熱中できるものがある。
1 まったくあてはまらない 2 あまりあてはまらない 3 どちらともいえない 4 ややあてはまる 5 非常にあてはまる
- 第53問 他人から関心を持たれている。
1 まったくあてはまらない 2 あまりあてはまらない 3 どちらともいえない 4 ややあてはまる 5 非常にあてはまる

- 第54問 役に立ってないと感じる。
1 まったくあてはまらない 2 あまりあてはまらない 3 どちらともいえない 4 ややあてはまる 5 非常にあてはまる
- 第55問 存在を認められている。
1 まったくあてはまらない 2 あまりあてはまらない 3 どちらともいえない 4 ややあてはまる 5 非常にあてはまる
- 第56問 周囲の人を自分だけ知らない状況である。
1 まったくあてはまらない 2 あまりあてはまらない 3 どちらともいえない 4 ややあてはまる 5 非常にあてはまる
- 第57問 孤立している。
1 まったくあてはまらない 2 あまりあてはまらない 3 どちらともいえない 4 ややあてはまる 5 非常にあてはまる
- 第58問 嫌々ながら入っていかなくてはならないと感じる。
1 まったくあてはまらない 2 あまりあてはまらない 3 どちらともいえない 4 ややあてはまる 5 非常にあてはまる
- 第59問 寂しさを感じる。
1 まったくあてはまらない 2 あまりあてはまらない 3 どちらともいえない 4 ややあてはまる 5 非常にあてはまる
- 第60問 多くの人に囲まれている。
1 まったくあてはまらない 2 あまりあてはまらない 3 どちらともいえない 4 ややあてはまる 5 非常にあてはまる
- 第61問 違和感を感じる。
1 まったくあてはまらない 2 あまりあてはまらない 3 どちらともいえない 4 ややあてはまる 5 非常にあてはまる
- 第62問 周りの人と類似している。
1 まったくあてはまらない 2 あまりあてはまらない 3 どちらともいえない 4 ややあてはまる 5 非常にあてはまる
- 第63問 自分のペースでいられる。
1 まったくあてはまらない 2 あまりあてはまらない 3 どちらともいえない 4 ややあてはまる 5 非常にあてはまる
- 第64問 良い評価がされていると感じる。
1 まったくあてはまらない 2 あまりあてはまらない 3 どちらともいえない 4 ややあてはまる 5 非常にあてはまる
- 第65問 周りの人と楽しい時間を共有している。
1 まったくあてはまらない 2 あまりあてはまらない 3 どちらともいえない 4 ややあてはまる 5 非常にあてはまる
- 第66問 周囲に溶け込んでいる。
1 まったくあてはまらない 2 あまりあてはまらない 3 どちらともいえない 4 ややあてはまる 5 非常にあてはまる
- 第67問 疎外されていると感じる。
1 まったくあてはまらない 2 あまりあてはまらない 3 どちらともいえない 4 ややあてはまる 5 非常にあてはまる
- 第68問 周りに共感できる。
1 まったくあてはまらない 2 あまりあてはまらない 3 どちらともいえない 4 ややあてはまる 5 非常にあてはまる
- 第69問 自分を他人と比較している。
1 まったくあてはまらない 2 あまりあてはまらない 3 どちらともいえない 4 ややあてはまる 5 非常にあてはまる
- 第70問 周りから理解されている。
1 まったくあてはまらない 2 あまりあてはまらない 3 どちらともいえない 4 ややあてはまる 5 非常にあてはまる
- 第71問 一定の役割がある。
1 まったくあてはまらない 2 あまりあてはまらない 3 どちらともいえない 4 ややあてはまる 5 非常にあてはまる
- 第72問 自分に非があると感じる。
1 まったくあてはまらない 2 あまりあてはまらない 3 どちらともいえない 4 ややあてはまる 5 非常にあてはまる
- 第73問 周りから期待されている。
1 まったくあてはまらない 2 あまりあてはまらない 3 どちらともいえない 4 ややあてはまる 5 非常にあてはまる
- 第74問 満足している。
1 まったくあてはまらない 2 あまりあてはまらない 3 どちらともいえない 4 ややあてはまる 5 非常にあてはまる
- 第75問 好きなことができる。
1 まったくあてはまらない 2 あまりあてはまらない 3 どちらともいえない 4 ややあてはまる 5 非常にあてはまる
- 第76問 退屈である。
1 まったくあてはまらない 2 あまりあてはまらない 3 どちらともいえない 4 ややあてはまる 5 非常にあてはまる